

岡
本
敏
子

岡
本
太
郎
に
乾
杯



新潮社

岡本敏子

岡本太郎

蘇工業学院图书馆
藏 章
榎

おかもと た ろう かんぱい
岡本太郎に乾杯

1997年1月15日発行

■著者 おかもととしこ
岡本敏子

■発行者 佐藤隆信

■発行所 株式会社新潮社

郵便番号162 東京都新宿区矢来町71 振替00140・5-808

電話 編集部(03)3266-5411 読者係(03)3266-5111



■印刷 株式会社光邦 ■製本 大口製本印刷株式会社

© Toshiko Okamoto 1997. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-304111-0 C0071

目次——岡本太郎に乾杯

戦闘を開始する 5

世界の“前衛”を日本へ 37

新しい芸術運動をめざす 53

縄文の発見から日本再発見へ 93

彫刻に挑む 109

パリ回遊 129

スポーツマン・ピアニスト太郎 155

太陽の塔の季節 179

岡本太郎の孤独 199

あとがき 211

写真
奈良原一高
装帧
新潮社装帧室

岡本太郎に乾杯

戦闘を開始する

花田清輝との出会い

岡本太郎という存在が日本にとって、いったい何であつたのか。

とりわけ戦後の五十年、彼は全存在をかけて、何を問いかけ、何をぶつけたのか。――

この国はついにそれを受けとめなかつたような気がする。亡くなつたいま、秘書であつた私がゴマメの歯ざしりしたつて、仕方がないけれど。

訃報が伝わつた日、磯崎新はこう書いた。岡本太郎は「対極主義のような矛盾をかかえこんだままで、荒業を演じつづけた。よほど日本が好きでないとやれなかつたことだろう」と（「朝日新聞」一九九六年一月九日付夕刊）。

いみじくも言つて下さつた。好きだつたんですよ。そしてそれに徹した。勿論その愛は演歌風のべたべたした慕情ではなく、非情に突っぱなした、つまり、――運命に殉じるという覚悟だつたのだと思う。

戦争直後は、彼も夢を見ていた。その時代は誰もが腹をすかせ、仕事もなく、しかし眼はキラキラして、何か新しいことがはじまるのだ、動きだすんだ、と確信していた。飢えているのにやたらに歩きまわり、集つては声高に喋り、飲み屋でも闇市でも、人々は信じ難いほど陽気で、元気だつた。

そして岡本太郎には、やるべきこと、その筋道がはつきりと見えていた。画壇の陰気な固定化

したピラミッドを叩きつぶすこと。さらに絵とか文学とか、狭い枠や村意識に捉われない「芸術」をこの風土に吹き起すこと。自分こそは宇宙の中心である、という個の尊厳と自由感をみんなの中にとり戻すこと。

彼は象徴的な言葉と、行動と、作品によって、猛烈な戦闘を開始した。

〈絵画の石器時代は終わった〉と新聞紙上で宣言し（「読売新聞」一九四七年八月二十五日）、これからの歴史は岡本太郎からはじまると言つてのけた。不可侵の権威としておさまっていた美術批評の長老に論争を挑み、揶揄し、怒りのあまり「十年後に岡本太郎がまだ残っているかどうか、首を賭ける」とまで言わせた。

作品がまた悪口雑言を浴びせられた。色音痴、色気違い、絵の描き方をまるで知らない下手糞とさんざんだった。今見ると戦後の絵は抒情性もあり、骨格正しい絵画で、なぜあれが好かれなかったのか不思議な気がする。だがその頃の日本の油絵のもやもやと曖昧な、ヤニ色の画面しか見たことのなかった人たちにはあまりにも刺激が強すぎたのかもしれない。

しかし悪口ばかり言われているのに発表する作品はいつも話題作で、新聞にも大きく取り上げられ、グラフ雑誌などが展覧会の特集を組めば表紙は岡本太郎が色刷りになるという風。名前だけはたちまち有名人になっていた。

だが彼はその頃、これでは駄目だ、と考えていたようだ。一人でこんなことをしていても実りがない。このままではただの、ちょっと変った人気者、毒舌や乱暴な言葉づかいがかえってお客のひいき心をくすぐる芸人のように、あいつはああいいうヤツなんだ、で片づけられてしまう。も

つと徒党を組んで、という言葉は悪いかもしれない、同志を得て、集団の力で全体を動かす。世の中全体をひっくり返すにはそれしかない。——「運動」という思いが、痛切に彼の中に芽ばえてきた。

花田清輝（一九〇九〜七四）に出会ったのは一九四八年（昭和二十三）、まさにそういう時だったのだ。

清輝との出会いについては、彼自身が簡潔ないい文章を書いている。つけ加えることも、なぞることもないと思うが、それが日本人同士としては極めて稀な会い方だったことは面白いと思う。普通、共通の友人がいるとか、知り合いになる場があったとか、それが飲み屋だったり、たまたま同窓ということだったり、おおむね非本質的な偶然のめぐりあわせで交友がはじまることが多い。ところがこの二人はまったく違う。

ストリートに、岡本太郎が花田清輝の著作『錯乱の論理』に感動し、それを伝えた。清輝がストリートにそれに応えたという純粹現象。精神のスパークだった。

清輝を得て、彼はどんなに力づけられたことだろう。日本に帰って来て以来、はじめて、何でも語りかけられる友、向こうも鮮烈な問題意識をもってピシャツとそれに受け応えしてくれる、互いに高めあいながら、問題を掘り下げ、突き進めて行ける、一人の同志に出会ったのだ。

岡本太郎のアトリエは、当時、世田谷の上野毛にあった。多摩美（多摩美術大学）の裏手の、ちよつと凹地になった所。ここに来るには、かなり急な石段を下りてこなければならなかった。応接間の出窓から、その石段がよく見えるのだ。後に、それを眺めながら彼は時々、はじめて花田



上官の命令で肖像画も描いた軍隊時代

清輝と会った時のことを思い出して、こう語った。

「あその階段をね、清輝が肩をいからして、怒ったような顔をして下りて来たんだよ」

思い出しても笑みがこぼれるという風で、

「突き進む、という感じで。こっちに向かつて、真直ぐ、たつたつと下りてくる。アッ、花田清輝だ、とすぐ解った。顔は全然知らないし、写真を見たこともなかったんだけどね」

向かいあつて話しはじめると、初対面なのに二人はすぐにお互いを見抜いた。旧知のように話はずんだ。花田さんという人は人見知りが激しくて、知らない相手だとひどく構えて居丈高になつたりする人なのだが、そんなことは全然なかったらしい。育つて来た境遇も、得て来た教養の質もまるで違っているのに問題意識はピシヤリピシヤリと一致し、熱中して、暗くなるのも気づかなかつたそう。

日本に芸術運動を起さなければならぬ。そうだ、一緒にやろうという結論に達した。

そうして二人の出会いの年に組織されたのが「夜の会」である。最初は銀座の焼けビルの地下室みたいところに集まつたそうだが、その会のことは私は聞いていない。花田さんの呼びかけで、野間宏、埴谷雄高、椎名麟三、梅崎春生、安部公房、関根宏、佐々木基一などが参加し、上野毛のアトリエで、語りあつた。さて会の名をどうしようかとなつた時、ちょうど描きあがつて間もない《夜》（二九四七）という作品がアトリエの正面に架かつていた。「そうだ、夜がいい。『夜の会』にしよう」ということに一決したと聞いた。一九四八年二月十三日の「世界日報」紙には「夜の会」と題した岡本太郎の宣言のような文章が載っている。

岡本太郎は意外に組織者だった。マメでもあった。母親のかの子が名づけ親である銀座の「モナミ」の主人に掛けあって、彼が東中野にひらいていた洒落たレストラン（ブルー・タウト設計）の一室を、月二回、無料で借りられることにしたのである。気どりのない、だが洗練された個人住宅風のこの近代建築に、およそふさわしくない、貧乏くさい芸術青年や左翼風の若者などがぞろぞろと集まって来て、公開討論会が催された。私も東京女子大の友達と一緒にわくわくしながら聞きに行った。紅茶一杯、いくらだったか忘れたが、それが会費代りで、たったそれだけで二時間も三時間もえんえんと論議、熱弁が続くのだから、東中野モナミはさぞ驚き、迷惑したことだろう。その会合以外は絶対にお客になりそうもない人たちばかりなのだから。しかし集まる人にとっては駅のすぐ傍で足場もよく、しかも静かな特別室のこの会場は有難い贈りものだった。夕方近くなつてさすがにみんな疲れてくる。議論もほぼ出つくして、下降気味。誰言うことなく「では、この辺で」ということになる。みんな、ぞろぞろと立ち上がって出て行こうとするのだ。

「おいおい、ちよつと待つて。次は誰が何を話すんだ。テーマを決めておかなきゃ」
きちつと締めて、次回の会合の予告、予約までしますのは、いつも岡本太郎さんだった。隅っここの末席で見物しながら、私は、へえー滅茶苦茶尖鋭な議論ばかりしているようで、この方は意外に機能的なんだな、と感心した。

だから何かの都合で彼が現れなかったり、この役を放棄すると、誰もそれを務める人はいない。会合はずるずると流れて終り。次回はいつ、何をやるのか、うやむやのままになつてしまふの

だ。

あれだけ華やかだった「夜の会」の活動が自然消滅してしまったのは不思議なような気がするが、別に理由はなくて、ただ岡本太郎さんが面倒くさくなってしまっただけではないのかと私は思っている。

だが花田さんとの友情は、ついに彼が亡くなるまで変らなかった。

清輝はその後、「新日本文学」の編集や、武井昭夫と組んで「記録芸術の会」など、より左翼的な方向に進み、一方岡本太郎は『今日の芸術』（一九五四）や『日本の伝統』（一九五六）などのベストセラーを書いて、芸術家のための芸術運動ではなく、より一般大衆の生活感に直接呼びかける道を選んだ。また壁画やミニメント、デザインなど、じかに生活の中に入って行く幅広い仕事も手がけ、猛烈に忙しくなっていた。

会うことは次第に少くなっていたが、それでもちよつと身体があいて自由な時間が出来ると、「清輝を誘って、飯でも食おうよ」とすぐ電話をかけた。清輝さんもまた、どんな時でも、否やを言わず、即座に応じて出て来た。いそいそという感じで、約束の場所に現れる花田さんの、ちよつと恥ずかしげな、だが一応肩をそびやかして、早足で近寄ってくる姿は、ほほ笑ましくて、今でも眼に浮ぶ。時には太郎の運転する車で、花田さんの家まで迎えに行った。ベルを押すと、待ちかねていたように、身支度した彼が出て来る。すぐに車に乗り込む。奥さんに挨拶するひまもないくらいだ。そしてすぐ話しはじめる。

凄い議論をするわけではないのだが、お互いの今とりかかっている仕事の話とか、気にかかっ

ている問題を自分に確かめるように相手にぶつけてみるのか。実に楽しそうに。……ああいうのを、知己というのだろう。何でもない会話が、いわば太刀先の遊びであり、清輝が突っ込み、パツと飛躍する、その切っ先を何気なくヒラリとまたいで、お互いニコツとする、というような。緊張と余裕があり、何とも言えぬいい雰囲気。聴衆が私一人というのは誠に勿体ない、贅沢極まらない饗宴だった。

一つの会話を思い出す。

ある時、岡本太郎が「文藝春秋」に頼まれて「わが二等兵物語」という、軍隊時代をテーマにした文章を書いた（一九五七年四月号）。彼の生き方、信条、価値観とはおよそ正反対の世界に放り込まれて悪戦苦闘する、いわば悲惨な話なのだが、その筆は明るくユーモラスで、読む者は思わず笑ってしまう。中に「四番目主義」というくだりがあった。与太者くずれの下士官が夜、理由もなく初年兵を並べてなぐる。横一列に並ばされて、その中から誰でも、自分で名乗り出てぶんなぐられるのである。しょっちゅうやられているうちに、だんだん分つて来たことは、一番目、二番目はまだ調子が出ていない、気ばかりはやって効果はそれ程でもない。三人、四人目と拳の調子も乗って来て、四番目が一番猛烈だ。

へ私は決心した。「よし、どうせならいちばんひどい時にオレが出てやる。」私は四番目に出ることを心に決めた。みんなの犠牲になつてやろうなんて殊勝な気持ちでは決してない。ただ、到底に落とされた自分を逆のためす、「オレは最悪を引きうける。」そう賭けたのだ。

しかしいいよとなると、さすがに総身から血が引く。目をつぶる。……一人目、うーっ、ド

タン。……「何のだれだれ。」「この野郎ッ。」アアッ、ギャアッ、ボタン。「これしきのこと何だっ、立てっ。」なんて物音をじつと心に噛みしめている。

……一人、二人、三人、よし今度だ。

最後にぐつと下っ腹に力を入れて、パツと前に出ようとする。トタンにはっと思う。膝小僧がガクガクツとして、思わずノメツてしまうのだ。頭と精神では耐えていても、身体のはうはおびえて、恐怖に負けてしまっている。気力はあるが、肉体はこわいのだ。だが、バランスを取りもどし、突っ立つと、

「陸軍乙種幹部候補生、岡本太郎ッ。」

「ようし。」

グワンと右から入る。だがビビビツと炸裂するのはそこではない。反対側の、頬から三〇センチほど離れた空間に火がふくのだ。

時には瞬間に気を失う。

ハツと気がつくと、土間に尻もちをついていたり、目の前にそいつのぶちになった顔が「立てッ。」とどなっている。

またフラフラと立って、やられる。その時はもう痛みと、肉体的な抵抗のほうにすべてが集中してしまふ。だから気分はむしろ楽なのだ。とび出す瞬間の恐怖、瞬間の虚脱感、異様で、真空のような実感であった。

このエッセーは評判がよくて、いろんな人に「あれは面白かった」と言われた。「大変な目に